

「只見 移住物語」

就農（南郷トマト農家）編

編集・連絡先：只見町役場 地域創生課

TEL 0241-82-5220

FAX 0241-82-2117

「只見 移住物語」

就農（南郷トマト農家）編 目次

- 第一章 《人が食べる物を作るという喜びを感じます》
伏見 正寛 様 (52 歳)
知恵 様 (49 歳)
- 第二章 《昔から植物を育てるのが好きだったからです》
高木 正貴 様 (52 歳)
- 第三章 《植物が好きなので、やはりトマト栽培が出来るのは移住した喜びです》
松沢 健次 様 (74 歳)

南郷トマト農家

【移住者のご紹介】

- ・お名前：伏見^{ふしみ} 正寛^{まさひろ} 様（52歳）
- ・ご家族：伏見^{ふしみ} 知恵^{ともえ} 様（妻 49歳）・ご長男（小学校5年生）・正寛様のご両親
- ・いつ：平成18年3月
- ・どこから：東京都板橋
- ・どこへ：只見町 明和地区 梁取区
- ・いましていること：トマト農家
- ・まえにしていたこと：技術系 サラリーマン



伏見 正寛様、知恵様 ご夫妻 ご自宅前で

【始まり】

移住した時の年齢は38歳です。移住前は普通のサラリーマンでした。

サラリーマンとして、この年代は組織中で真ん中に当たり、だんだん技術系の仕事が出来なくなる立場になっていました。社内で開発と言った好きなことが出来なくなっていたのです。何か自分で物を作るのであれば会社を辞めようかと考えていました。

（正寛様）

【家族】

私への相談はありました。反対はしませんでした。色々と考えたら不安になりますし、家族として夫と一緒に進むことを考えていました。私の両親からは「あそこは雪の多いところだよ」と言われましたが、反対はありませんでした。(知恵様)

私は、いま私の両親と一緒に暮らしていますが、初めはトマト農家になることについて反対していました。(正寛様)

【準備】

自立して自分で何かをしようと考えたときに、幾つか選択肢はあり、その中に「農家」がありました。ただ農家と言っても果物や野菜といった種類がありますので、何件か見学をしました。自分で自立して施設農業をするのであれば、最初の自己投資にはお金がかかります。その点では只見町の助成が整っていたのでトマトを選び、トマト農家になりました。

移住先を探すために、東京で開催されているセミナー、有楽町や池袋で開催された就農セミナーなどに参加しました。福島県から担当の方が来ていて只見町を紹介されたのがスタートです。他にも山形県にも行きました。(正寛様)

長野の果樹も考えました。二人とも東北出身なのです。主人は福島県 浜通りの双葉町で、私は岩手県 水沢(現 奥州市)です。長野だと実家から遠くなってしまうので、なるべく実家の近くにしましょうと主人に言いました。(知恵様)

トマト農家になると決めてから面接がありました。落とすための面接ではなく「トマト農家」になる覚悟というか、しっかりとした気持ちを持っているかどうか確認するための面接だったと思います。(正寛様)

最初の家は、役場の方に探してもらい梁取に住みました。自分の家を建てる際に、仮住まいへ引っ越しましたが、その家も梁取にあり、居住家屋はすべて梁取です。(正寛様)

【現在】

移住してから10年くらい冬の間は、スキー場でリフト係をしました。その後 大型特殊免許を取得し、ここ3年は除雪作業に従事しています。午前2:00頃に家を出て、午前7:00とか、8:00頃に帰ります。基本は夜中に出て、朝に帰る。昼は自由なのですが、大雪の時は、昼間に少し戻ってきて、またすぐに出て、帰るのは夕方になる事もあります。(正寛様)

年に数回ですけど、大雪の日には一日中 除雪しているのではと言うくらい忙しいことがあります。子供の冬休みだと、子供はお父さん子なので、遊んでほしくて昼も寝てられない。

(知恵様)

只見は雪がネックになっていて雪が降れば農業はできないので、トマト農家の方は夏と冬はまったく別のことをします。前もって冬は別の仕事をする聞いていたので、移住してから自分で知り合いの方に聞くとか、集落の方から声を掛けてもらい、仕事を見つけました。(正寛様)

私は、午前中だけ老人施設の清掃パートをしています。(知恵様)

【変化】

移住して良かったと感じる事は、トマト農家として、思い通りにできているかは別ですが、やりがいを感じます。人が食べる物を作るという喜びを感じます。(正寛様)

夫は休みなく働いています。すごく働いていますね。東京なら土、日曜日が休みだったのですが、文句も言わず働いています。用事がないと休まないのです。例えば、子供の用事とか、医者に行くとかで、子供を医者連れて行くため若松に行くときに一緒に休むと言った感じで、用事がないと休まないですね。家でぼーっとしていることはないですね。

(知恵様)

【将来】

どのような暮らしをしたいですかと言うと、特にこうなりたいと言うことはなく、体が健康で毎日きちんと働けることが望みです。規模を拡大するとか、人を雇って農業法人にすると言うことは考えていません。(正寛様)



トマト苗の準備作業

【不便】

こちらに来て、雪に慣れるまで、どう対処するのか戸惑いました。一晩で1m近く降られると、雪の扱い方がわかりませんでした。知らないので簡単に考えていたようで、やはり除雪の機械を持つとか、人を頼まないと生活できないのだなど、初めての年に思いました。

(正寛様)

【健康】

早寝、早起きです。(正寛様)

【アドバイス】

移住した当初は、お金が必要になるので、ある程度は経済的に余裕があって、健康でないとならなければいけません。医療環境が都会ほど整っていないので大変だと思います。(正寛様)

眼科や皮膚科が遠くて大変でした。(知恵様)

トマト栽培の最初の頃は、どんなことがあるかわからないので、なかなか時間が取れませんでした。慣れてくると行く日を決めておいて、仕事の調整をしながら病院へ行くことが出来るようになりました。今はそれほど不便とは思っていません。(正寛様)

田舎に来たからといって、自分の好きなように暮らせるかというところではありません。やはり人付き合いは大切です。田舎に来たから、私は私の生活をする、閉じこもって好きにできるのだと思ってしまうと、地域に溶け込めずに孤立してしまいます。部落の行事や、普請(地域の共同作業)には参加しないと、ここに来た本当の意味、価値が分からなくなってしまいますね。(正寛様)

地域とのコミュニケーションを取ることは都会よりも大切なことになると思います。特に百姓をすれば、困ったときにお互いに助け合う「結」が残っているので、助けることもあれば、助けてもらうこともあります。(正寛様)

【生活】

皆さん、子供を大切にしてくれて、とても助かっています。(知恵様)

主人が趣味で和太鼓をしていて、それが地域に溶け込むことに役立った気がします。

(知恵様)

和太鼓の会は仙嶽太鼓せんがくたいこといいますが、雪まつりでも演奏しています。

もともとここに太鼓のチームがあったのですが、メンバーの年齢が高くなり活動を休んでいたものを、太鼓も揃っていたので、私が引き継ぎ活動しています。(正寛様)

【印象】

焼肉をする時に牛肉ではなくマトンを食べるのは面白いと思いました。(正寛様)

食べきれないくらい野菜を頂き、驚きました。(知恵様)

冬のイメージを暗く持たないで、大変ですけど明るく捉えてほしいです。スキー、スノーボードが好きな人なら、お金をかけることなくいくらでもできます。(正寛様)

南郷ではスノーボードをやりたくて通って来ているうちにトマト農家になった人が多いです。私はこちらに来てスキーを覚えました。楽しいです。(知恵様)

2020年6月15日 ご自宅にてインタビュー

インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博

南郷トマト農家

【移住者のご紹介】

- ・お名前：高木^{たかぎ} 正貴^{まさたか} 様 (52 歳)
- ・ご家族：純子^{じゅんこ} 様 (妻)、長女(独立 神奈川県 在住)、長男(独立 福島市 在住)、
クー (柴犬-14 歳)
- ・いつ：平成 16 年 4 月
- ・どこから：神奈川県 厚木
- ・どこへ：只見町 明和地区 坂田区
- ・いましていること：トマト農家
- ・まえにしていたこと：公営企業 サラリーマン



ご自宅の前で 高木正貴様

【始まり】

移住する前の生活はサラリーマン、残業もあるごく普通のサラリーマンでした。転勤族だったので本社 東京、大阪や、札幌にいたこともありました。最後の勤務地は横浜でした。

移住を考えた理由は、昔から植物を育てるのが好きだったからです。農業を考えていました。植物を育てることに関係のない会社に勤めましたが、会社務めしているときも市民農園を借りて植物の生育に携わっていました。36歳あたりの頃でしたか、自分の好きなことを仕事にしたいと考えました。会社が嫌になったと言うのではなく、両方はできないので、どちらかを選ぶなら農業をしたいという思いが固まり、会社を退職しました。

【家族】

家族が4人いての一大決心です。嫁さんへの相談はしていました。私が昔から農業が好きだと言うことを知っていたので「いずれそのような話にはなるだろう」とは思っていたようです。「農業をするのなら一緒にやるしかない」と賛成してくれました。今でも家族の理解がなければ「これは絶対にしてはいけない事だ」と思っています。

移住した時に、上の娘は小学校2年生、長男は幼稚園の年長で状況がよくわからないと言った感じでした。転勤族でしたので引っ越しはそれまでもありましたが、子供たちが田舎の環境に馴染めるのかについては心配しました。

いざ来てみると嫁さんを含め、家族みんなが地域に旨く溶けこめたと思います。この理由は周りの地域の人が、皆さんよくしてくれたお蔭だと理解しています。上手に生活させてもらっているのだと感じます。このことはとても大きなことで、これが旨く行くか、行かないかで、営農も順調に進む、進まないに関連してくると思います。

【準備】

会社務めしていたころから、いわゆる「田舎暮らしの本」を読んでいたのですが、本格的に農業をしようと活動を始めたのは最後の2年間くらいです。土日に地方へ出向き、県庁とか市とか、町役場から直接話を聞きました。どのような土地か訪れ、補助金の条件などの情報を集めました。

各自治体でIターンなど受け入れをしていたので、いろいろなところへ見学に行きました。新潟、長野、群馬などです。例えば群馬ならハウレンソウ産地、長野なら薬物レタス産地などで受け入れをしていました。群馬のハウレンソウ産地では、2代目への引き継ぎが進み、空き農地がないという話。また高崎の奥にあるK村では、自営自作したものを産直して生計を立てている人がいるという話も聞きました。

ただ自分には農業のノウハウも、販売ルートもありませんでしたので、「自分で好きなものを作っていいですよ、さあどうぞ」と言われても生活できません。やはり農業をするのであれば組織なり、販売形態がしっかりしているところを選ぼうと考えていました。

南郷トマトとの出会いは、福島の実験場でフェスティバルがあって、その中に就農相談コーナーがあり、そこでトマトなら受け入れてくれるところがあると紹介を受けた事が始まりです。ただ当時の旧南郷村はいっぱいだったので、隣の只見町なら空きがあるのではないかと言われ只見町役場へ行きました。それまで私は只見と言う土地の名前すら知りませんでした。南郷トマトの話聞き、訪れた先々の条件とも見比べ、只見町が一番整っているので決断しました。

只見町との話しが整い、正式に受け入れが決まると、役場で住居を紹介してくれました。その家を借り、しばらくして家主さんから売ってもらい、2012年にいまの家に建て替えました。

【現在】

トマトの他には自給用にお米を作っています。

この2年間は冬季間何もしていませんが、それまではスキー場のリフト係として働きました。「只見特産(株)」と言う山菜工場でも働いたこともあります。

妻は、夏は一緒にトマト作りをし、冬は看護師として働いています。



高木さんのトマト圃場 全景

【変化】

移住して良かったと感じることは、当然 経営者として自分の裁量で好きなようにできるのが良いところです。ここがサラリーマンとは違いますが、一方自己責任という不便もあります。

【将来】

子どもも独立し、経済的な目途もある程度立ってきたので、規模の拡大は考えていません。ただ、密度を濃くすることを考えて行きたいです。効率を上げるというか、収量より収益を増やせるようなことを考えています。

【不便】

暮らし始めて困ったことは、物理的な不便さは否めないと思います。何か物が足りないと言ってすぐ買いに行くとしても、最低でも田島へ行かないと手に入らない事です。都会ならすぐ近くにホームセンターがあり買えます。いまはネットも発達していて、ネットで購入することもできますが、どうしても1日~2日はかかってしまうので、時間とコストの不便さを感じます。

あと医療です。いまは健康で何も問題はありますが、ここが少し心配です。

【健康】

健康面で注意していることは、お酒の適量を守っています。都会から来れば、ご飯と水と空気の違いが分かりますね。ご飯がとても美味しいのです。

歩くように心がけています。自分は、冬場 四国遍路を歩いています。四国お遍路八十八か所を1回歩き、2回目は自転車で行きました。冬は自由な時間があるというのが、ここの良いところではないでしょうか。

【アドバイス】

田舎に来たら好きな事が出来るかという、そうではありません。やはり周りときちんとした関係を築く努力を重ねないと孤立してしまいます。このことを理解して、実行できない方は、田舎に来てはいけないと思います。よくありがちな田舎というイメージで、移住してくると、違った時の落差は大きいです。

田舎暮らし=農業とは決めつけしないで下さい。農業でなくても、工場勤めもできますし、自分のスキルを活かして自営も可能です。農業がやりたくて、田舎暮らしというのはあり得ますが、田舎暮らしのツールとして農業といった短絡的な考えでは失敗してしまいます。田舎で暮らすために農業をするという気持ちでは、農業に手を出さない方が良いです。

農業はそんなに簡単ではありません。

本当に農業をしたいなら、自分たちは歓迎します。その覚悟というか、決意があって初めて、農業に入ってきて欲しいと思っています。

【生活】

ご近所とのお付き合いで、心がけることは「挨拶」です。「おはようございます」は当然ですが、そこにもう一言付け加えると良いと思います。「暑いですね」でも、「今日は雨が降るのですかね？」でもいいです。プラス、もう一言が、大切なのです。当然 普請(集落の 共同作業)には参加するように心掛けて下さい。

【印象】

移り住んで驚いたのは、都会の人間関係の密度とは違うという事です。最初は、誰でも戸惑うかもしれませんが「この地域はこのようなもの」と、心の間口を広く開けると良いと思います。都会感覚で、すべてプライバシーがどうのこうのと言いだめると、それは正しいことかもしれませんが、気疲れしてしまいます。

都会でいたときの感覚とはやはり違う。当然 土地が違えば違うのだと、文化も違うわけで、それに驚いても、それにあまり引きずられてもいけない。地域に溶け込み旨くやって行こうとするなら、この様なものだと受け入れる事がいいと思います。ただ無理して溶け込もうとしても疲れてしまうので、その塩梅が大切だと思います。

移住したら、なんでも話ができる地元の方を早く見つけることを勧めます。お酒を一緒に飲んでくれる人でも良いし、世話を焼いてくれる人でも。最終的に頼れる人がいることが、外から来た人には本当に心強い事だと思います。外から来た人同士で集まるのも良いですが、やはりこの地域で育った人が身近にいと、この地域でうまくいくノウハウを、色々とアドバイスしてくれると思います。

2020年6月15日 ご自宅にてインタビュー

インタビューアー 移住コーディネーター 生天目 博

南郷トマト農家

【移住者のご紹介】

- ・お名前：松沢 健次 様 (74歳)
- ・ご家族：長男 ^{たけし} 健 様 43歳 (独立 南郷トマト農家)
 - 長女 41歳 (独立 沖縄県 在住)
 - 次女 39歳 (独立 山梨県 在住)
- ・いつ：2010年
- ・どこから：埼玉県 越谷市
- ・どこへ：只見町 明和地区 布沢区
- ・いましていること：南郷トマト農家
- ・まえにしていたこと：コマースナル フォトグラファー・写真DPE店舗 経営



南郷トマトビニールハウス 休憩所 (ブドウ「巨峰」棚の下) にて

【始まり】

趣味の溪流釣りで1980年頃から只見へ通っていました。魚影の濃い黒谷川にヤマメ、イワナを求め通っていました。暫くして「田舎暮らしの本(田舎の不動産物件を紹介する雑誌)」に載っていたT株式会社の記事を見て、いま住んでいる土地を紹介してもらいました。土地を見に行った際、ミズナラの森の中にあるのがとても気に入り、すぐに購入しました。その後、コツコツと手作りで家を建てました。

【準備】【家族】

移住を考えるきっかけは、フィルムカメラからデジタルカメラへの移行が進み、写真DPE店舗をたたんだことにあります。でも、その後の移住もトマト農家になることも順調に進んだ訳ではありません。

一昔前 トマト農家になるための補助金とか支援は、今のように整ってはいませんでした。当時の補助金の給付条件は「45歳までの夫婦に限る」と言った感じで、それは厳しいものでした。そのような状況下 当時から親しくして頂き、いまでもお世話になっている地元の篤志家M氏から、その方の所有するビニールハウスを使ってトマトを作り始めてはどうかと力添えを頂き、翌年からスタートするまでに辿り着きました。確か、まだ私が住所を移す前だったと思います。

トマト農家への道筋が見えてきたところ、妻に癌が見つかりました。M氏へ事情を説明し、妻の治療に専念するために越谷へ戻ることにしました。

2011年 妻が亡くなりました。私は一人で只見に戻りビニールハウスを借り、自己流のトマト作りを始めました。ここでもM氏のアドバイスがあつて南郷トマト組合員になることを決意しました。いまでも一定の研修期間を経てトマトの育成技術を身に付け、その後も指導を受けながらトマト農家として独立する、これが正式ルートなのでしょうが、南郷トマト組合の幹部の方にお会いし『私は高齢で、余っている時間も少ないので「研修」は省いていただけませんか?』とお願いしました。結果として「2年間の指導」を受けながらトマト栽培をスタートさせ、南郷トマト組合員になることが出来ました。それが10年前、私が65歳の時のことです。

いま私の圃場の隣には、長男 健が管理するビニールハウス棟があります。健も南郷トマト組合員で、独立して生計を立てています。写真DPE店舗を経営しているときは、彼に仕事を手伝ってもらっていましたが、店舗を閉めてからは、アルバイトで生計を立てていたと思います。

私がトマト農家として先行きが見え始めてから、彼には「只見に来てトマト栽培をしないか」と声を掛けていました。2015年 彼は只見に来て、トマト作りを始めました。

私は、人との出会いに恵まれ、多くの支援を受けてトマト農家になることができました。長男は、周りの方々の支援だけでなく、制度的にも大きな恩恵を受けトマト農家になることが出来たと思います。

植物が好きで、田舎の環境が好きな若者にとっては、本当に魅力のある地域、制度だと思います。



トマトビニールハウス 全景

【現在】【将来】

いまトマト栽培が楽しくて仕方がありません。植物に興味のない人には、つらい作業かもしれないかもしれませんが、自分にとってはこれほど楽しいことはありません。あんなに溪流釣りが好きだったのに、今ではトマト一筋です。

トマト栽培のない冬季にはガーデニングを楽しんでいます。私 実は、二地域居住者なのです。もう 3~4 年になりますか、山梨県 U 市に娘がいるのですが、そこに中古の別荘物件を購入しました。かつて A 村（旧南都留郡 A 村、のち U 市に合併）と言われていたところです。私のいるところは山の中で標高 600m 程、寒いところです。雪も何回か降りますが、こと比べれば一日で融けます。

大好きなターシャ デューダ（米国の女性 挿絵画家、絵本画家、園芸家）の世界を作ろうと、男版ターシャデューダに成ってガーデニングに励んでいます。

【変化】

こちらに来る前、趣味で世田谷 上町にあるイタリア レストランを利用した料理教室に通ったことがあります。そこでサンマルツアアーノという加熱用トマトに出会いました。

当時 サンマルツアアーノは、生では手に入り難いトマトで、国内流通はほぼ缶詰品でした。これを生で食べてみたい、料理に使ってみたいと思いました。試しに只見で作ってみると良いものが出来たのです。トマトソースを作り、パスタに絡ませ、食べるととても美味しかった。

少しずつ生産量を増やし、固定客もでき、将来を楽しみにするまでになりましたが、5年前 長男が南郷トマトを作り始めたのをきっかけにすべてを止めました。

理由は二つ。サンマルツアアーノを作るとなると、やはり南郷トマト作りが、どこかおろそかになること。そして、健が南郷トマト農家になったことです。

【アドバイス】

田舎の緩さというか、緩やかなところが田舎の良さという思いに至らず、最初に来た時は色々なところとぶつかり、怒りまくっていました。いまは慣れたというか、こういうものかと理解できるようになりました。むしろ慣れると、こちらの方が楽だと思えます。暮らして行く、生きて行くには、本当は、このやり方が良いという気がします。

ただ慣れるまで、理解できるまでは、やはり、そこそこの衝突や対立があり、それらを自ら消化することで到達できる精神的領域なかもしれません。これから移住する方へアドバイスというか、私の実感をお話しするなら、私は住所（生活の本拠点）を動かさないで通っていた時期が長かったのですが、住所を移さないで本当の姿は見えないと思います。

つまり地域のメンバーにならないと本当の姿は見えません。いくら通っても本当の姿は見えないように思えるのです。住所を移して、地域の一員になって、集落の人と付き合いが始まって、本当の姿が見えてくるように思えます。

兼ね合い、塩梅が本当に難しいのですが、そうなって（住所を移し、地域の一員になり、集落の人と付き合いが始まる）から、自分の考えを主張するところと、抑えるところを意識して暮らして行くことが、良いのではないかと思います。

【生活】

ご近所とのお付き合いで心がけることは、地域メンバーに入って色々と見えてくるまで、付かず離れずの程よい距離が取れると良いですね。

【不便】

暮らし始めて本当に困ったと言うことはありません。いま困っていることもありません。

【不安】

自然は最高に良いところだと思いますが、人が減ってきていますね。人がいなければ不便になり、暮らしづらくなります。これから只見はどうなってゆくのだろうと思ったりすることがあります。

しかし、私が只見を選んだ理由は「何もないところだから」です。「何もないことをアピールしよう」と言えば、地元の方に怒られてしまいかねない話ですが「すべてある世界からやってきた人にとっては、何もないところが心穏やかになる」のではないのでしょうか。観光地がないのもとても良いですね。デメリットとされているものが、実はメリットに変わる、そんな時代がすぐ近くに来ている気がします。

農地をどのように守ってゆくのか、根本的に農地をどう守ってゆくのか考えて行く事が必要ではないかと思っています。農地をないがしろにしている国なんて、世界中を探してもないでしょう。農地をどう守るか、色々提案もあるでしょうが、それらはすべて昔ながらの考え方に依存した手法なのです。根本的に農地を守る、維持する、活用する方法を考え、変える時期に来ているのではないかと思っています。農地は絶対に守らなければいけないと思います。

【印象】

植物が好きなので、やはりトマト栽培が出来るのは移住した喜びですね。また自然とのふれあい、只見の自然は何物にも代えがたいと思います。越谷市もU市も、ここも植物の植生がかなり違うところがあります。その違いを発見したりするのがとても楽しいです。

2020年7月21日 圃場 休憩所にてインタビュー
インタビューアー 移住コーディネーター 生天目 博